

石塔は石造の仏塔であり、古代インドに発した仏教信仰に伴って、日本では奈良時代に造立が始まり、中世の列島各地で供養塔や墓塔として盛んに造立された。石塔は中世の地域史、信仰史を検討する上で欠かせない資料となっている。

本論文は、東国（相模・武蔵・上総・下総・安房・常陸・上野・下野・伊豆・駿河・遠江・甲斐・信濃国）に所在する、中世とその前後の時期に造立された石塔を対象として、考古学の手法による資料調査と集成、型式分類と編年を行い、その成立と展開の過程を明らかにし、地域間の比較を行うことで、中世東国に造立された石塔の地域性を考察することを第1の目的とする。この成果を踏まえて、石塔に刻まれた銘文資料、文献史料を用いた中世史や宗教史研究の成果を援用して、歴史的ないし信仰史的背景を検討し、石塔造立を担った中世東国の人物や信仰などの具体像を明らかにすることを第2の目的とする。なお石塔を構成で大別すると一石造りの板碑と、五輪塔や宝篋印塔など複数石造りの組合せ式石塔があるが、本論文では組合せ石塔を主として扱う。

序章で宗教史、考古学など多様な学問分野に関連する石塔の資料的性格、仏教考古学の研究手法を確認したうえで、研究の目的と方法を示した。また現在までの全国的な石塔・石造物の研究状況を整理し、東国における組合せ式石塔の研究の現状を把握した。さらに東国の石塔石材の種類や流通範囲、および石材と型式の関係性、日本における石塔造立の流れを概観した。

第1章では、奈良時代から鎌倉時代中期に至る石塔造立の全体像を検討し、東国の中世石塔が12世紀後半の北関東に成立することを確認し、平安時代の層塔、鎌倉時代中期の特殊五輪塔などの未定型段階の石塔の様相を検討した。

第2章・第3章では、石材と塔形の関連を明確にするため、南関東で主体を占める伊豆安山岩製石塔を対象として、第2章で、五輪塔、宝篋印塔、宝塔、層塔の各事例を集成し、基礎的検討と型式分類・編年作業を行った。第3章では、戦国期から近世初頭における伊豆安山岩製石塔の型式変遷とその背景を考察した。さらに近世初頭に成立した江戸型石塔の地方展開、その西限域にあたる伊勢・志摩～三河の具体的様相を検討した。

第4章では、特定地域で組合せ式石塔と板碑がいかなる展開をみせたのかという視点のもとで、南武蔵の組合せ式石塔、南多摩地域の武蔵型板碑、多摩地域の伊奈石板碑の各様相を検討し、地域における組合せ式石塔と板碑の複合的な展開状況や、両者の消滅・存続時期の相違などを検討した。また品川の古刹海晏寺に所在する五輪塔を対象として、文献史料も援用し石塔の海運移動や、造立者として海晏寺中興の有徳人榎本氏が想定されることを考察した。

第5章では日蓮宗信仰にともなう中世の題目石塔の成立と列島各地の所在状況を整理して、信仰の拡大とともに題目石塔が全国展開する状況を確認した。次に東国の題目板碑の主

尊勸請様式の分類と展開を検討し、日蓮宗独自の信仰表現の変遷や門流による差異を示した。

次に東国日蓮宗の主要寺院である池上本門寺、中山法華経寺の具体例を検討し、池上本門寺では種子板碑との比較により、題目板碑の生産体制などについても言及した。また戦国末期の鎌倉大巧寺の檀越濱名氏による造塔供養を、過去帳など文献資料も援用して明らかにした。

第6章では、一石五輪塔、南関東に残る西日本製石塔、水晶五輪塔を取り上げ、東国に変則的に所在する石塔の位置付けを行うことで、全体の理解を深める一助とした。

結論では、石塔の型式の意味を改めて検討した。石塔の型式は、石塔自体の流通、文化の伝播によって各地に広がっている。範型となる石塔があり、その模倣によって型式が広がっているが、地域毎の型式の検討によって範型と模倣品の関係を明らかにすることで、文化の伝播の実態を地域の関係性としてうかがうことができる。しかし政治・宗教の特定権力と石塔型式の関係性については、石塔の普及程度によって様相が異なっており、石塔普及前の特注品段階では政治・宗教権力との関係が想定できるが、普及後の流通品段階では関係は希薄になることが想定できた。また型式編年に求められる年代の基準という点では、銘文により絶対年代が判明する石塔では、定型化以前の短期型式が併存する不安定な段階と、定型化以後における長期型式による安定的段階があることが確認された。

また東国の石塔の変遷を改めて整理し、東国の地域性を以下のように明らかにした。東国最古の石塔は山上多重塔であるが、次代に続くことはない。中世に継続する石塔の初現は、12世紀後葉に現れる笠塔婆・石幢に求められる。ついで13世紀初頭に宝塔、13世紀中葉までに緑泥片岩製の板碑、五輪塔・層塔などが造立されている。この段階までの石造物はほぼ北関東に分布しており、その背景として幹線としての東山道を通じた文物・情報の移動、道忠教団や天台宗信仰による宗教環境などの要因が考えられる。

これら石塔の出現過程は列島規模のもので、北関東地域が東山道により畿内や平泉と繋がっていた影響が大きいものであるが、石塔型式には直接的な関係性は認められない。

東国と他地方との石塔関係が明確になるのが13世紀後葉以降であり、真言律宗の教線拡大と石工の東国下向により、畿内大和の石塔型式の伝播が認められる。これは忍性の足跡と合わせて文応～弘長頃(1260年)頃の常陸筑波に初現し、文永初年(1270年代)以降の鎌倉周辺の宝篋印塔、五輪塔、宝塔、層塔などの伊豆安山岩製の各種石塔の造立に及んでいる。

宝篋印塔の分析では、大和地域の影響を強く受けながらも早く在地化が進み、型式変遷のなかで14世紀初頭に定型的ないわゆる「関東形式」が成立すると、鎌倉を中心とした周辺地域の石塔型式に大きな影響を与えた。

伊豆安山岩製の石塔は鎌倉という中世東国の中心地での造塔需要に応えるとともに、「武士の都」鎌倉の発信力によって周辺地域に伝播した。この段階では大和→鎌倉→周辺地域という鎌倉を軸とした石塔型式の展開が認められる。

伊豆安山岩製の石塔造立は14世紀第3四半期から15世紀第1四半期が盛期であり、相

模・南武蔵を中心として、上総・下総・伊豆・駿河・遠江などの太平洋沿岸の広域に流通している。また石塔型式は甲斐・信濃・上野・下野・常陸の地域、遠くは陸奥北部に伝播しており、その結果広域に及ぶ「関東形式圏」が形成されている。

伊豆安山岩の製品は 15 世紀代に小型化が進み、16 世紀代に粗雑化して在銘品がほぼ確認できなくなるが、16 世紀後半に 14 世紀代の製品を模した「復古様式」の精製塔が突如として登場する。この間、東国各地の石塔に畿内からの断続的な影響が窺われるが、伊豆安山岩製品には及ばず保守的な展開が続いていた。ところが近世に入った 17 世紀初頭に大坂和泉砂岩製の製品や石塔型式がもたらされると、伊豆安山岩製石塔の形態は一変し、関西由来の新型式と関東の旧型式が混合・変容した独自の「江戸型」が成立する。13 世紀末に導入され三百年の間継承された伊豆安山岩の石塔型式は、東国中世の終焉と共に消滅した。

安山岩製江戸型石塔は再び東国各地に影響を及ぼし、大阪→江戸→周辺地域という江戸を軸とした石塔型式の展開が認められた。

以上のように東国石塔製作の中心地は 12～13 世紀の北関東地域から、14 世紀以降に鎌倉を中心とする南関東に移動し、さらに南関東では当初の鎌倉から 17 世紀以降の江戸に推移した。これは鎌倉幕府、江戸幕府という政治権力の中核地の推移を反映しており、13 世紀末と 17 世紀初頭の類似現象の再現は恒常的な東国と畿内との関係性を物語っている。

また石塔銘文を資料として東国中世石塔造立を担った人物像を検討し、古代以来の有力氏族、守護、武士、名門御家人、大名、国人領主など、時期や地域によって変遷する様々な支配者階層の関与を推定した。また単なる個人の葬送や供養に止まらず、氏族、宗教、村落などの共同体の結束が意図されて造立されたことを氏族供養塔や結衆塔を通じて確認した。

以上に概略を記したように、石塔形態を対象とした考古学的分析、銘文を対象とした文献史料的分析による成果を複合的に捉え、石塔を歴史資料として位置づけて中世東国社会の様相の一端を明らかにした。